



Title	Height and Mortality from Aortic Aneurysm and Dissection
Author(s)	高田, 碧
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/87859
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

Synopsis of Thesis

氏 名 Name	高田 碧
論文題名 Title	Height and Mortality from Aortic Aneurysm and Dissection (身長と大動脈疾患による死亡との関連)
論文内容の要旨 〔目的(Purpose)〕 身長と大動脈疾患との関連についての報告は少なく、大動脈疾患の病型別、男女別に身長と大動脈疾患による死亡との関連を調べた研究は国内外いずれもみあたらない。 〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕 40～79歳の日本人99,067人（男性41,730人，女性57,337人）を対象とした前向き研究である「Japan Collaborative Cohort Study: JACC study」において、対象者を1988～1989年から2009年末まで追跡した。自記式の身長の男女別の四分位に応じた病型別の大動脈疾患による死亡のハザード比（95%信頼区間）を、Cox比例ハザードモデルを用いて解析した。調整因子は、Body mass index、喫煙状況、飲酒状況、精神的ストレス、歩行時間、運動時間、教育歴、鮮魚摂取状況、雇用状況とした。 中央値19.1年の追跡期中に、大動脈解離、胸部大動脈瘤、腹部大動脈瘤による死亡者数はそれぞれ、121人，46人，63人（男性：56人，29人，48人，女性：65人，17人，15人）であった。身長の最小四分位（男性：159cm未満，女性：148cm未満）に対する最大四分位（男性：167cm以上，女性：155cm以上）における大動脈疾患による死亡の多変量調整ハザード比（95%信頼区間）とトレンドP値は、大動脈解離で1.45（0.83-2.51），$P=0.06$、胸部大動脈瘤で0.60（0.23-1.56），$P=0.36$、腹部大動脈瘤で2.21（1.05-4.62），$P=0.04$であった。 男女別の検討では、男性において大動脈解離で1.13（0.48-2.64），$P=0.65$、胸部大動脈瘤で0.61（0.19-1.99），$P=0.45$、腹部大動脈瘤で1.85（0.80-4.28），$P=0.16$、女性において大動脈解離で1.70（0.82-3.50），$P=0.04$、胸部大動脈瘤で0.56（0.11-2.94），$P=0.60$、腹部大動脈瘤で5.67（0.90-35.77），$P=0.08$であった。 〔総括(Conclusion)〕 日本人集団において、特に女性で、身長は腹部大動脈瘤による死亡と正に関連することが明らかとなった。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

(申請者氏名) 高田 碧			
論文審査担当者		(職)	氏 名
	主 査	大阪大学教授	磯 博 康
	副 査	大阪大学教授	坂 田 泰 史
	副 査	大阪大学教授	阪 部 聡
論文審査の結果の要旨			
身長と大動脈疾患の関連は、主に欧米人で、身長が高いことと大動脈瘤の死亡・発症、腹部大動脈瘤の発症リスクとの正の関連が散見される。しかしながら、欧米人と比べ身長の低いアジア人だけを対象とした分析や、大動脈疾患を胸部大動脈瘤・腹部大動脈瘤・大動脈解離のそれぞれの病型別に分けた分析、男女別に検討した分析は存在しない。 本研究は、欧米人と比べて身長の低いアジア人でも、身長が高いことが大動脈疾患のリスクを上昇させる要因になりうることを、一般住民を対象とした前向きコホート研究で明らかにし、大動脈疾患の病因には病型毎に差異が存在する可能性を示した重要なエビデンスを提供するものであり、博士（医学）の学位授与に値するものと認める。			